

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008 ～ 2009

課題番号：20780163

研究課題名（和文）：漁村活性化における生計の多角化戦略—流通市場化と住民組織の役割—

研究課題名（英文）：A strategy of diversification in livelihood for revitalization of fishing communities

研究代表者

久賀 みず保 (KUGA MIZUHO)

鹿児島大学・水産学部・助教

研究者番号：50432688

研究成果の概要（和文）：

本研究は、東南アジアの漁家が漁業活動の中でどのように収入の多角化を図ろうとしてきたのかを実態から明らかにするものである。フィリピンの調査対象地域では、漁船漁業が営まれていたが災害をきっかけに政府の支援により住民グループが組織され養殖事業が開始されている。当該グループでは、ミルクフィッシュの養殖を中心に行っている。半年サイクルの出荷体制が確立されており年 2 回の出荷で約 3 トンの水揚げがある。成魚は 100 ペソ/kg で流通業者に販売される。種苗調達と飼料は、昨年まではフィリピン水産局から無償提供されていたが、現在では自己資金での調達が可能となっている。種苗は、近隣の養殖漁家から 5 インチほどの大きめのサイズを購入している。生残率は 90%以上と育成のリスクは非常に小さい。また飼料は民間業者から購入している。人件費は労働種類ごとにローテーションが決められ、組合員が順番に担当する仕組みとなっている。ローテーションに参加しているのは 36 名であり警備や生け簀の清掃などに従事して賃金を得る。組合員は沿岸漁業を主とする漁業者であるが、この事業によって補完的な収入を得ている。

また、出荷後の収入のうち 50%がこのシステムで労賃に向けられるが、残りの 50%は自己資本として貯蓄にまわされる。開始当初は援助資金に頼っていた養殖事業であったが、現在では運転資金を事業の収益から捻出しており、加えて貯蓄も可能となっていることなどから、この事業が当該地域の自立的な産業として軌道にのりつつあることが明らかとなった。

多くの組合員は、沿岸で漁獲漁業に従事しているが、この養殖事業への参加によって家計の補完的な収入を得ているようである。これらは漁家の代替収入機会となっており、今後はそれらを市場流通にのせることによって、生計戦略としての可能性が強まると思われる。この点は、生計の多角化によって漁村地域の発展方向を展望する上で有効な端緒となった。

研究成果の概要（英文）：

On August, 2006, the oil spill disaster occurred off the coast of Nueva Valencia, Guimaras. A lot of assistance for reconstruction was provided in the affected area.

This research shows the overview and present status of the projects of marine fish culture. This project of marine fish culture is conducted by the Philippines government (BFARMC) as the oil spill livelihood and rehabilitation program. The area of activities is barangay (village) Igdrapdap, Nueva Valencia. In February, 2007, a group of fishermen which is called "TIFNA" were set up to operate the aquaculture. The number of members is 52, who used to engage in the coastal fishing such as gill net, hook and line and gleaning. There are no members who have engaged in the marine fish culture.

The target fish of the marine culture is mainly milkfish. Continuing to steady increase the production amount, it has become around 30,000 ton. Those milkfish are sold to local fish vendors and distributed in Guimaras. The members gain an extra income from the job, including guard, feeding and fixing cage. They receive the work by rotation.

In the beginning the projects, running cost was granted by the national government. However, now this group is able to provide running cost from their profit of the marine fish culture, not to need financial support.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度			
2006年度			
2007年度			
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：水産経済

科研費の分科・細目：農業経済学・農業経済

キーワード：漁村，住民組織，生計の多角化

1. 研究開始当初の背景

フィリピンは、広域的な沿岸域資源管理の試みが先駆的に取り組まれてきた。一方、水産物流通のグローバル化が進み、ローカルな資源が海外市場とリンクし、所得へと結びつくことが期待されている。しかし、近年は、海外輸出市場と深く結びついた商業的生産が目的となり、過剰漁獲によって資源の減少が問題となっている。

水産資源の利用に過度に依存している漁村では、資源利用に対する圧力を緩めるために漁業内外の代替収入源の確保が必要である。

2. 研究の目的

漁業収入への依存度が高い漁村において、漁家は漁業活動のなかでどのように収入の多角化を図ろうとしてきたのか、その戦略を実態調査から明らかにする。

また、長期的な視点からみれば、漁民にとって所得源泉の多角化を図ることが家計戦略となるが、資源を持続的に利用する必要性について、漁業者、住民と理解を深めることはさまざまな社会環境やそれらを取り組む社会システムが前提となる。漁村にある住民組織の機能と役割を把握し、漁家の経営多角化を可能にする共同組織のあり方を検証する。

3. 研究の方法

フィリピンの漁村地域を事例対象に(図1)、実態調査を実施し、上記の目的に接近する。



図1 調査対象地の位置

4. 研究成果

調査対象地域では、もともと漁船漁業が営まれていたが、養殖事業や観光事業が開始されている。養殖事業については、19年2月に住民グループが組織され52名が組合員となっている。生け簀を6ヶ所設置しており(写真1)、約2万尾のミルクフィッシュ(写真2)、スズキとアワビの養殖が行われている。現在のところミルクフィッシュが中心であり、半年サイクルの出荷体制が確立されており年2回の出荷で約3トンの水揚げがある。成魚は100ペソ/kgで流通業者に販売される。



写真1 養殖事業の状況
資料：筆者撮影



写真2 ミルクフィッシュ
資料：
<http://www.faiacqua.com/techcooperation5.html>

人件費は労働種類ごとにローテーションが決められ、組合員が順番に担当する仕組みとなっている。ローテーションに参加しているのは 36 名であり警備や生け簀の清掃などに従事して賃金を得る。組合員は沿岸漁業を主とする漁業者であるが、この事業によって補完的な収入を得ている。また、出荷後の収入のうち 50%がこのシステムで労賃に向けられるが、残りの 50%は自己資本として貯蓄にまわされる (図2)。

開始当初は援助資金に頼っていた養殖事業であったが、現在では運転資金を事業の収益から捻出しており、加えて貯蓄も可能となっていることなどから、この事業が当該地域の自立的な産業として軌道にのりつつあることが明らかとなった。

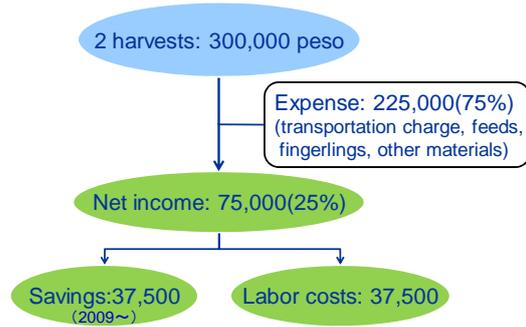


図2 グループにおける養殖事業の収支
資料：実態調査より筆者作成

多くの組合員は、沿岸で漁獲漁業に従事しているが、この養殖事業への参加によって家計の補完的な収入を得ているようである。これらは漁家の代替収入機会となっており、今後はそれらを市場流通にのせることによって、生計戦略としての可能性が強まると思われる。この点は、生計の多角化によって漁村地域の発展方向を展望する上で有効な端緒となった。

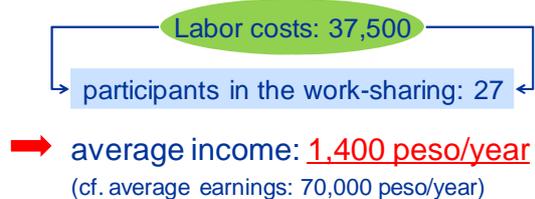


図3 漁家への代替収入の配分
資料：実態調査より筆者作成

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 久賀みず保「非価格競争力の獲得を目指した中小産地加工業の展開」、漁業と漁協、第549号、2008、pp.20～25
- ② 佐野雅昭・久賀みず保「水産物貿易の変化とその背景農村と都市をむすぶ」第684号、2008、pp.14～25

〔学会発表〕(計1件)

- ① Mizuho Kuga, Overview and Present Status of the Oil Spill Livelihood and Rehabilitation Program – the Projects of Marine Fish Culture in

Guimaras, the Philippinesー、ネガティブインパクトの水産資源に対する影響に関する研究拠点形成に関するシンポジウム、2009年11月1日、鹿児島大学

〔図書〕（計1件）

- ① 久賀みず保他 22名「ポイント整理で学ぶ水産経済」北斗書房、2008、pp.22-36

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久賀 みず保 (KUGA MIZUHO)
鹿児島大学・水産学部・助教
研究者番号：50432688